教育・スーパービジョン委員会担当シンポジウム

「カウンセリング心理士（会）の歩むべき道」

― 2022 年度第 3 回相互研究（研修）会での講演内容について（報告） ―

田所摂寿（教育・スーパービジョン委員会委員長）

tadokoro@sakushin-u.ac.jp

1. はじめに

2022 年度よりカウンセリング心理士会の体制が変わり、新たな体制としてスタートしました。社会状況としては、コロナウイルス感染症 2019 による社会的な影響をはじめとして、心理職に求められる役割も大きく変化してきました。国家資格である「公認心理師」も、だいぶ活躍の幅が広がってきました。そこで、改めて日本カウンセリング学会の専門資格である「カウンセリング心理士」を考えてみたとき、そのアイデンティティのあり方をもう一度考え直してみる時期でもあると思います。

2022 年 11 月 23 日に開かれたカウンセリング心理士会相互研究（研修）会では、教育・スーパービジョン委員会の企画として「カウンセリング心理士（会）の歩むべき道」と題してシンポジウムを行うことになりました。ここでは先述の視点にもとづき、カウンセリング心理士会の現会長、次期会長、そして元会長にお集まりいただき、カウンセリング心理士会の過去、現在、未来を語っていただきたいと企画しました。このシンポジウムでは今までの歴史を含めて振り返り、現在や未来に向かってわれわれ「カウンセリング心理士」がどのような方向性を見出していくのかについてさまざまな視点から語られました。とても有意義な内容であり、この会に参加できなかったカウンセリング心理士の皆様にもぜひ知っていただきたい内容であると考え、今回はここに記録としてお伝えすることになりました。

2. シンポジウム

(1)「本シンポジウムの目的」小林正幸（教育・スーパービジョン委員会副委員長）

今日の内容を説明します。今日の話者の順番は笈田育子先生、田上不二夫先生、井ノ山正文先生の順番で進めたいと思います。と申しますのは、現在のカウンセリング心理士会会長の笈田先生から、新しい会長として、これから先の会長としての抱負をお話しいただきます。次に、前日本カウンセリング学会理事長、元認定カウンセラー会（カウンセリング心理士会）会長として長くご尽力されてきた田上先生より、過去を振り返ってというお話をいただきます。そして最後に井ノ山先生からは、次期カウンセリング心理士会会長としてこれから先の未来についてお話をいただきます。

ここで一旦休憩を挟んだところで、田所先生より指定討論として問題提起を行ってもらった上で、今日ご参加の皆様からの意見も頂戴していきたいと考えております。

(2)「カウンセリング心理士(会)－これから向かいたい世界－」笈田育子（カウンセリング心理士会会長）

皆さん、こんにちは。今年の 7 月から 3 年間、カウンセリング心理士会の会長としてお役を頂戴いたしました。私に何ができるのかしらと思いつつ会長職としての責任は自覚していますので、やれるところで皆さんとやっていきたいと考えています。

「カウンセリング心理士（会）の歩むべき道」というか、私としては「これから向かいたい世界」という感じで皆さんとお話できたらいいなと思っています。これからカウンセリング心理士会、みなさんが向かったら幸せになれる世界とはどのようなところかという視点でお話をしていきます。

実は私自身の問いということで、「カウンセリング心理士会を機能している会にするために、何をしたらいいのか？」、これは一言では言えないことです。前会長の飯田先生や元会長の小林先生もいろいろとご苦労されてきたことです。しかしこの何年かで会員は正直減っています。最初の頃は 1000 人弱でしたが、現在では 650 人程です。それから公認心理師ができて、どうもカウンセリング心理士は社会に知られていないと感じていて、どのような会にしたいのか。どのようなことが会員の皆様の役に立つのか、学び、親睦、社会貢献、何なのかな、こんなことをなんとなく呟いていました。今こうやって話しをしながら、また文字にしてみて思うことは、知的な言葉ではないだろうな。それは何かなと思ったときに、言葉にならずに落ちている言葉がたくさんあるのだと思います。すなわち地になっている言葉です。図ではなく地になっている言葉は私の中にも、まだまだたくさんあります。その言葉は知的な言葉をたくさん覚えるのではなく、私の内側から、こころの中からとでも言うのでしょうか。身体の感じであったり、思っていることだったり、考えていることだったり。つまりそういう自分の内側に則した内側から発せられる適切な言葉であるものにそって、なるべく適切な言葉として表していくことが本当の意味での語彙力になるんだろうと思います。だから身体の声から少しずつ紡ぎ出してくるというのは、とても大切ですしカウンセリングには必要なんだろうと思います。言ってみればフォーカシングのフェルトセンスをいかに言葉にしていくのかなんだろうと思います。今、私はこんな風に言葉にしてみました。でも、私がこぼしているいろいろな視点があると思います。今日参加している皆さんの視点がとても大切です。どれも、いけないものは何もない、正しいことは何もない、良い悪いではない。今ここで皆さんが感じていること、考えていることを、発言している人が、まだ図にしていない地のことを拾っていただいて、発言したりしてくださるとありがたいなと思っています。

米国におけるカウンセリングの歴史

カウンセリングの定義というのが私としては、モヤモヤしています。カウンセリング心理学者の数だけカウンセリングの定義があると言われています。そこで、日本カウンセリング学会やカウンセリング心理士会では、どのような定義を使うのかということを考えてみたいと思います。カウンセリングの歴史として始まったのは、職業指導運動です。ここでカウンセラーという言葉が出てきています。続いて教育測定運動です。それから、精神衛生運動です。このあたりの話は皆さんよくご存知だと思います。これら三分野での運動が全米で始まりました。これが 1900 年代はじめです。そして職業相談所や教育、医療の現場でカウンセラーの必要性が高まりました。アメリカの産業構造や生活環境の急速な変化が求められるようになりました。これは専門性の高い事柄について相談にのり、指導・助言を行う、ガイダンス的な要素が強かったということです。この頃は「指導・助言」だったんですね。

日本におけるカウンセリングの歴史

以上のようなアメリカの流れが、日本にどのように入ってきたのかを見ていきたいと思います。日本では一時「カウンセラー」や「カウンセリング」が大ブームになりました。私もその頃に勉強しだし

ました。日本ではカウンセリング・カウンセラーという言葉が使われたのが、第二次世界大戦後なんですね。1910 年頃に、職業選択や教育相談ということは入ってきたそうです。その頃に紹介されたものと第二次世界大戦後に紹介されたカウンセリングは、少し違うとされています。日本での導入は 4 つのルートがあると言われています。一つはローガン・J・ファックスさんが、1949 年に現在の茨城キリスト教大学の前身「シオン学園茨城キリスト教短期大学」の初代学長となって伝えたということなんです。このローガン・J・ファックスさんが 1949 年に東京教育大学心理学科からアメリカの講演依頼を受け、このときにカール・ロジャーズの来談者中心療法についてお話をしました。それを聞いた学生であった友田不二雄さんが興味を示して、「Counseling and Psychotherapy」というロジャーズの初期の本を借りて勉強をしたということなんです。

その他には、東北大学の心理学者の正木正さんが、1948 年の秋に教育指導者講習教育施設団の講師として来日したコロンビア大学の児童心理学者アーサー・T・ジャーシールから学んだということです。正木先生は後に京都市教育研究所に移籍をしまして教育相談を始めたそうです。ここで初めてロジャーズの方法を試みたため、京都がカール・ロジャーズのカウンセリングが普及する一つの拠点と言われています。それから、戦後に IFEL という組織（GHQ の下部組織である特別参謀部・民間情報教育局 CIE）と文部省の共催で、教育関係の専門家の養成を目的とした講習会を開いたそうです。このときの指導者は、米国から招聘された学者と日本の大学教授でした。対象は、全国に設置された教育委員会の教育長や小中学校の指導主事、教育のリーダーたちでした。5 年間で 9300 名ほどが受講して、相談業務というかカウンセリングというものを勉強して普及させていきました。このときは進路指導、職業指導、ガイダンス講座など、各自の個性を尊重した民主教育や職業指導を行うようになりました。

それから、伊東博先生がガリオア資金で留学をして、勉強をしてきています。このあたりでちょうど人間の情動や非合理性を扱う心理療法的なものが米国で求められるようになりました。ウイリアムソンたちは、「臨床的カウンセリング」ということで医者の診断と治療過程をモデルにした合理的方法、職業・進路指導には適していたが、青少年のパーソナリティや適応の問題には十分対処できないことが分かりつつあったということで、カール・ロジャーズの理論が登場しました。

もう一つのところが、精神科医（国立東京第一病院精神科部長）の井村恒郎先生が、最先端の研究論文が集まる日比谷の CIE 図書館でロジャーズの本を読んだ。この 4 つルートがあって、日本にカウンセリングが導入されてきたというわけです。ですから GHQ が 2 つ、ローガン・ファックスさん、それからこの井村先生ということなので、どちらかというとお上からが 2 つ、民間からが 2 つ、こんな導入のルートだったそうです。

カウンセリングの定義

2011 年の『カウンセリング心理学ハンドブック』上巻にカウンセリングの定義が載っています。「カウンセリングとは、カウンセリング心理学の科学に基づき、クライエント（来談者）が尊重され、意思と感情が自由で豊かに交流する人間関係を基盤として、クライエントが人間的に成長し、自立した人間として充実した社会生活を営むのを援助するとともに、生涯において遭遇する心理的、発達的、健康的、職業的、対人的、対組織的、社会的問題の予防または解決を援助する。すなわち、クライエントの個性や生き方を尊重し、クライエントが自己資源を活用して、自己理解、環境理解、意思決定及び行動

の自己コントロールなどの環境への適応と対処の諸能力を向上させることを支援する専門的活動である。」これをまとめると、①カウンセリングの基盤となる理論は人間の発達とその促進に関する科学であること。②カウンセリングは、クライエントがカウンセラーから人間として十分に尊重される人間関係を基盤として行われることです。上下関係ではなく、クライエントを尊重する、クライエントもカウンセラーも命の重さは同じです。指導になってくると、少し上から教えて差し上げることがあるかと思います。③クライエントの人間的成長への援助。豊かな社会生活の実現への援助。生涯において遭遇する諸問題の予防と解決のための援助。だから 1 回問題解決したらいいというわけではなく、人生悩みがないということはないですから必ず悩みはまた出てきます。そのときに自分で解決していける、対応していけるという力を付けていくんだということです。④カウンセリングは、クライエントの個性と生き方を尊重することを第一とし、クライエントの自己資源を活用し、それを開発・発達させるとともに、それらをクライエント自身が十分に活用できるようにする援助であること。⑤豊かな社会生活は人の主体的生き方を保証する条件であり、人の福祉に貢献する条件である。つまり、カウンセリングは社会的環境と密接に関係しており、カウンセラーは調和の取れた人間関係、集団、組織および社会の維持や改善など、社会環境の整備に貢献すること。私たちが基本とするカウンセリングの定義というのは、個人だけではなく社会をもカバーするということが視点となっています。

『カウンセリング』が意味すること

カウンセリングの定義はたくさんあるのですが（外国の定義など）、どこに焦点を当てるかによって定義が変わってきます。もう一つ日本カウンセリング学会とカウンセリング心理士会のために、こんなことをやってみました。「カウンセリング」という言葉について、日本語に訳すとすごく広い意味でいっぱいありますからなかなか適切には訳せない。簡単に言えば「相談」となります。この「相談」を英語の辞書で引くと、すごく多くの言葉が出てきます。どんな言葉があるか。Casework、Orientation、Guidance、Talk. Consultation、Conference、Psychotherapy、Counseling、こんなにあるんですよ。これらすべてを考えてみると、カウンセリングという領域に入っているわけです。そのように考えると、「カウンセリング」とは、狭い意味ではカール・ロジャーズの来談者中心療法およびパーソンセンタード・アプローチを指す。広い意味では、心理・教育・福祉・医療・産業各領域で行われている相談業務を指すことになります。

カウンセリング心理士の活動領域は、各領域の方が参加していらっしゃる。これはすごく多様性だと思います。日本カウンセリング学会やカウンセリング心理士会の強みというのは、全ての領域に適したカウンセリングがあるということ。反面、分散してしまう弱みもともなっています。この多様性を強みにするにはどうしたらいいのか。皆さん、考えてください。すごく多くの視点があるし、立場がある。一つの目標を定めて、行く道を作っていくとまとまっていくのではないかと思います。その多様な領域に渡るカウンセリングの基本は何ですか。クライエントを大切にする相互関係です。その関係は安心で安全で、信頼できる関係であること、これを作ることが全ての種類の相談業務がうまくいくための基本です。どんな心理療法を使っても、カウンセラーとクライエントの信頼関係ができていなかったら、うまくはいかない。これは研究で出ています。その信頼関係の上に、さまざまな心理療法、手法が有効に機能します。安全で安心な信頼できる関係、場を作るには、カウンセラー側の良い悪い、好

き嫌いなどの評価的判断を除いた、無条件の積極的関心と相談者の内的照準枠に添った共感的理解、そして一番重要で大切なこと、純粋性・自己一致（カウンセラー自身の内側に照らし嘘のない居方）です。ですからここを学んで効果的なカウンセリング心理士になりましょうというのが、私の提案です。

カウンセリング心理士（会）の活性化のために何をしたら良いのか。会員相互の連携。それから、外に開くということ。それには何をしたらいいのか、皆さん考えてください。前に出て活動しましょう。社会貢献事業をやりましょう。そんなふうにやっていけたらいいなと思います。私一人でやるんではなく、みんなと一緒にやっていきたいと思っています。

（3）「認定カウンセラーからカウンセリング心理士へ」田上不二夫（カウンセリング学会前理事長・カウンセリング心理士会元会長）

カウンセリング心理士会がこれから発展していくために、これまで何をしてきたのかということについて皆さんと一緒に振り返ろうと思います。

資格活用と相談教諭

認定カウンセラーの資格認定が始まり、この資格はどこで使えるのかという問題が当然出てきます。そこで学会の資格検討委員会が最初に取り組んだのは医療分野です。ところがその時の壁は厚かった。いわゆるサイコセラピーというのは医療行為であり、医師の独占業務というわけです。実際には医療分野で活動している人はいたのです。例えば私が 30 歳のころに大学の保健管理センターのカウンセラーをしていたのですが、常勤の精神科医は非常勤の医師に、「ここの心理は不安症の支援ができるので心理に回してください」と伝えていました。

資格検討委員会は医療分野を断念して教育分野の検討をしました。教育分野にも壁があった。アメリカのスクールカウンセラーの主な仕事であるキャリア教育と進路指導は、日本では教師の業務の一部になっていたのです。そこで「相談教諭」という職種を考えました。これは教員免許を持っている人が大学院で学んで、受け持つ授業時間を減らして学校でカウンセリングを担当するという内容でした。その当時、小中高の教師が 1 年間あるいは数か月、大学でカウンセリングを学ぶ制度があり、それを活用することを考えました。日本カウンセリング学会だけでは難しいので、日本教育心理学会と日本キャリア教育学会と協力して文部省に交渉しましたが、なかなか実現しませんでした。結局どうなったかというと、教員免許取得の必修科目に「教育相談」と「生徒指導」が入ったことを一つの成果として、「相談教諭」は実現しないまま終了しました。

カウンセリング心理士の資格活用は、これからも重要な課題です。

養成プログラムの開発

資格活用について国への働きかけと同時に、カウンセラー養成プログラムの開発を始めました。資格認定制度を始めて 10 年以上経っても、有資格者が数十人程度しかいなかったのです。なぜ資格を取ることが難しかったか。カウンセリングに関する研究論文が必修となっているなど、ハードルが高かったのです。認定される人は大学の先生などが中心でした。人数がいなければ責任ある仕事ができない。カウンセラーになろうとしている若い人にも門を開こうというのが養成カリキュラムの開発と試

験制度の導入だったのです。大学院プログラムとして認定カウンセラー養成カリキュラムを作って特定の大学院を認定しました。また一般会員も養成プログラムを終了して試験に合格すれば認定カウンセラーになれるようになりました。この制度ができて認定カウンセラーを受験する人がとても増えたのです。試験制度に乗れなかった人、すでにカウンセラーとして活躍している人には推薦制度でいこうということになりました。

しかし資格認定試験の内容を改善してから受検者が減少しました。社会変化の影響もあるのですが、カウンセリング心理士会の存続に関係する課題です。

資格の名称変更とカウンセリング心理士の養成

「カウンセラー」という名称はいろいろなところで使われるようになり、「認定カウンセラー」という名称には専門性が感じられないから名称変更をという声が大きくなってきました。議論した結果、総会で「カウンセリング心理士」の名称に変更されました。また名称変更だけではなく、養成カリキュラムの見直しをしようということになりました。受講して知識やスキルを習得することではなく、実際にカウンセリングができるコンピテンシーを重視しようということです。初期の資格認定試験は、筆記試験とロールプレイだったのです。それが変更になり、スーパービジョンを受けた事例をもとに面接をすることになりました。ところがカウンセリングの実地トレーニングが入ることで、資格試験を受験する人がガタッと減ってしまったのです。

実地トレーニングの機会をつくることが大きな課題となりました。スーパーバイザーの養成カリキュラムの開発も検討してきましたが、まだできそうにありません。これらの課題を解決するヒントが教育スーパービジョンの研修会にありました。カウンセリングコンピテンシーの評価表をつくって、スーパーバイジーの自己評価をもとにスーパーバイザーとスーパーバイジーが話し合いながら進めていく、これならできるという気がするのです。もう一つの大きなハードルがゲートキーパーです。「あなたはカウンセラーとしての適格性がないですよ」と言い渡すのではなくて、その人がカウンセラーとしてやっていけるよう支援を行うということであれば、スーパーバイザーとしてもやりようがある。「あなたには適性がある」とか「適性がない」というのは、スーパーバイザーにとって負担が大きかった。これをカウンセラーとしてやっていけるように支援していくというプロセスに変更できれば、スーパーバイザーになる人が増えるのではないかと思います。スーパーバイザーが増えれば、スーパーバイザーの下でカウンセラーになりたい人が実地のトレーニングを継続的に受けることができ、カウンセリングコンピテンシーを持ったカウンセラーの養成ができるのではないかと思いました。

カウンセリング心理士会なりのスーパーバイザー養成は取り組むべき課題です。

東日本大震災と社会的活動

本学会が最初に関わったのは阪神淡路大震災のときだったと思います。そのときに会員の玉井先生が避難所をずっと回っていらっしゃって、それを学会の事務局に報告に来てくださっていました。そこでとても印象に残っていたのは、被災者たちの「私たちは病人ではありません」という言葉です。大震災が起きたときに、医師や看護師や心理士がたくさん入ってきた。そのときに聞いて回ったのは精神的健康とかトラウマとかストレスなどだった。それが被災者たちの「私たちは病人ではありません」

という反応だったと思います。そこで玉井先生が「カウンセラー」という腕章を付けて回ると、いろいろな人から声をかけられたそうです。「話を聞いてほしい」と次から次へと皆さんが話しに来る。その当時の茨木事務局長が「ぜひカウンセリング学会の腕章を作りましょう」となり、玉井先生が避難所を回って歩かれたのが最初の関わりだと思います。

それまでは学会では動けなかった。義援金を集めて、赤十字社を通じて被災者に届けるということまでしかやっていなかった。阪神淡路大震災をうけて認定カウンセラー会の中に危機支援部会を創設しました。実際に支援に行く際にはお金が必要になるので、基金の積立を行いました。支援の機運が高まってきました。

東日本大震災が起きて、日本人全体の気持ちが沈んでいた時です。危機支援部会長の小澤先生から「さいたまスーパーアリーナにあつまれ！」というメールが入ったのです。「認定カウンセラー会も支援に出かける！」「社会活動にいよいよ参加するんだ！」。足湯の開設は好評でした。5 月には危機支援委員会を中心に宮城県の現場に向かいました。この後危機支援研修会を開いたり、学会支援委員会を立ち上げたり、支部を中心に支援活動が開始されました。

カウンセリング心理士会は他の団体に比べていろいろな領域の人がいるので、はるかに有利なのです。他の学会や団体ではできない支援ができると思います。今後もこの特長を生かしていくことが大切だと思います。

法人化とさらなる発展

そのような中で出てきたのが、カウンセリング心理士会の社会的信用、つまり法人化です。法人化しておかないと、寄付などがもらいにくい。法人化によって社会的信用を得て資金を集めることができ、もっと積極的な社会的活動に参画することが出来るようになる。ただ大きな課題のひとつは資金的課題の克服です。現在、経済的に日本カウンセリング学会の支援を受けているのです。学会を離れて独立してできるのかどうかというのは大きな課題です。

以上が、これまでカウンセリング心理士会が行ってきた内容と課題です。会報に、その時々の活動が載っていますので、それを読んでいただけたらと思います。

(4)「カウンセリング心理士会のこれからを考える」井ノ山正文（カウンセリング心理士会次期会長）

これからのカウンセリング心理士、カウンセリング心理士会を皆さんと一緒に考えていければと考えています。本日の打ち合わせを行ったときに、カウンセリング心理士のアイデンティティという話が出ました。このときに随分と考え込んでしまいました。未だ答えが出たわけではありません。私にとっては、カウンセリング心理士であることのレゾンデートル（存在理由・存在価値）が大事なのではないかと考えております。この間、私自身の生活の中でも、カウンセリングを学んだことによって救われたことが多々ありました。最後の方ではその点にも触れていきたいと思っています。

現在の社会的状況

3 年にもおよぶ新型コロナウイルス感染症の影響下で、さまざまな問題が頻発してきたわけです。「非日常」が「日常化」し、非常にストレス過多の状況に置かれている。すべての人が当事者として、

このコロナ禍を経験してきました。また一方でロシアとウクライナの問題など政治的な緊張、そして社会的な不安というものが日々の情報の中でもあり、私たちの情報の受け止め方というものが懸念される現状にあります。一方、学校現場では休校措置が出たり、行事が簡素化、分散登校などが行われたりしました。このような中で子どもたち、学生、家庭、教員の負担が増大してきたわけです。

「with コロナと心理支援」の問題を考えるならば、生活環境の変化が大きかったと思います。また学校状況の変化が与えた影響が大きかったと思います。大阪大学の水野先生による、現場の先生方の心理的状況についてのリサーチなども行われている段階です。それから在宅ワークや STAY HOME が家庭に与えた影響は、やはり家庭内におけるトラブルの増加が否めなかったのではないか。また、Social Distance が与えた影響もあります。このように大きく生活状況が変わってしまった中で、皆さんがカウンセリングの現場で取り組まれてきたのではないかと思います。日本赤十字社が 2020 年の 3 月に提案した「3 つの感染症」というものがあります。第 1 の感染症は「病気」そのもの、第 2 の感染症はその病気に対する「不安」です。そして不安が脅威となって第 3 の感染症である「差別」が起こってきます。他者への攻撃や排斥が、日常の生活の中に多々みられたのではないかと思います。SNS の問題、ヘイトスピーチの問題などさまざまな社会的に不安となるような状況、すべてがコロナ禍に関係するわけではありませんが、このようなことが見受けられる現状にあります。もう一方では私たちが取り囲まれる情報化社会の加速度的な変化、これによって私たちが受け取る情報量は多くなっているのにもかかわらず必要な情報を受け取ることが難しくなっているのではないかと思います。

令和 3 年度の問題行動・不登校調査の結果が 10 月に出ました。いじめの認知件数は 615,351 件ということで過去最多でした。小・中学校における長期欠席者のうち、不登校児童生徒数は 244,940 人で、9 年連続で増加し過去最多でした。いじめの問題も文部科学省のデータがいろいろと出ています。さまざまな視点からの再検討が求められています。学校にスクールカウンセラーが配置されてからいじめ不登校が減ったのかについて、一時、財務省が費用対効果の問題で取り上げたことがあります。現場の状況をみてみると、スクールカウンセラーが相談室で待機しているだけではなかなか改善が難しい。どのようにスクールカウンセラーを機能させるのかというシステムを検討していかないと、スクールカウンセラーを増やすということだけでは解決しない。また虐待の件数も増加しています。207,659 件ということで過去最多となっています。家庭内でのトラブルが頻発している。スクールカウンセラーの役割、スクールソーシャルワーカーの役割についてどのように考えて具体的な取り組みをしていくのか、サポートが非常に求められていると思います。

カウンセリング心理士の仕事

先程もお話がありましたように、カウンセリング心理士会ではさまざまな領域で専門性を持たれた人が活躍しています。だから、学校や医療、産業をはじめとしてさまざまな知見を活かすことができるのだと思っています。チーム支援としての協働による援助は、カウンセリング心理士として大事な位置づけになっていくのだと思います。その内容としては、コンサルテーション、コーディネーション、アセスメント原案の作成と目標の共有です。それから多職種連携と視点の共有のための取り組みが大切になってくると思います。医療においても今は「チーム医療」ということが言われています。さまざまな職種の人たちが連携しながら、支援を必要としている人たちをサポートしている。コラボレーシ

ョン(co＋labor)「共に働く」ということの基本的な視点の共有が大事になってくるのかなと思います。ベーシックな部分で、何を共有し何を方向性として見出していくのかが大切です。冒頭お話をしました「カウンセリング心理士」あるいは「カウンセリング心理士会」のアイデンティティはなにかということにつながっていくと思います。

私たちの大切な視点というのは、Bio-Psycho-Social Model ではないかなと思っています。つまり医療モデルからの脱皮が必要なのかなと考えています。子どもであれ大人であれ、支援を求めている人たちに関わっていったときに、状態像だけを見るのだけではなく心理的背景や社会的背景、その中からその人に寄り添っていく。そういう視点がとても求められているのではないかと思っています。

WHO による ICF（国際生活機能分類）の構成要素間の相互作用に示されるように、個人因子だけではなく環境因子に目を向けていくことが必要なのではないかということです。例えば障がいがある方達については、バリアフリーから今はインクルーシブということが提案され、その取り組みが進んでいます。車いすの方だったら段差がなければ移動ができる、駅のエレベーターであったりノンステップバスであったり、社会的障害といいますか、活動を阻害する環境（要因）を変えていければ、いろいろな形でその方の生活の中における活動の範囲は広がっていくわけです。

カウンセラーの社会的役割

日本カウンセリング学会は、カウンセリングの定義解説をこのように示しています。「カウンセリングとは社会的環境と密接に関係しており、カウンセラーは、調和の取れた人間関係、集団、組織および社会の維持や改善など、社会的環境の整備に貢献する」つまりカウンセラーの社会的役割が示されています。さまざまな社会的事象に対して、カウンセラーの社会的役割という方向性からさまざまな課題に向けて情報を発信したり取り組むことが大切だと思います。さまざまな場面においてはさまざまな技法が存在すると思いますが、必要なときに必要な手立てを講じていく。多くの人が仕事を持ちながらカウンセリング心理士でもあるということだと思います。自分自身がカウンセリング心理士であり、自分が持っているさまざまなスキルを、今、支援を必要とされている方に活かすという点では、高い倫理性が介在するのではないかなと思っています。

社会環境が困難さを生み出している場合が多いのではないかと思っています。これから先どのように考えていったら良いのかというテーマに添って考えてみたときに、個人要因だけではなく環境要因にも視点を当て、その改善に取り組むことが非常に大切だと思っています。また、個人の脆弱性を焦点化することなく社会環境との関係に視点を向けること、つまり、「やっぱりあなたのこういうところが課題なんだよね」ということに焦点化することなく、その人の周り、地域・家庭・学校・社会的な全体の枠組みの中での関係に視点を向けることが必要になってくるかなと思います。キャリアや教育の目標達成を目指すとき、家庭・教育機関・福祉施設・職場・地域社会・行政・国家などの環境要因が大きな影響を与えていると思います。その中でなりたい自分になるための援助がカウンセリングにおいて大事なところかなと思っています。渡辺三枝子先生と面接させていただいたときに「井ノ山さん、キャリアにはアップやダウンもないのよ、どこにアンカーを下ろすかが大切でしょ」というお話がありました。私たちは社会生活の中での介入が求められていると思います。

多様な専門性を有するカウンセリング心理士

これからどうするのか。私は「おしゃべり Project」というようなお互いの情報交換をしたり屈託なく話したりする機会というのもあってもいいのかなと思います。それから、危機支援チームや教育支援チームなど、プロジェクトチームを組んで必要なときに必要な支援を行うことも、今後必要になってくると思います。

「なりたい自分になること、自己実現を援助する」ことが、メンタルヘルス、ウェルネスの向上につながるような取り組みを私たちが行うことができればと思っています。そして「生老病死」に寄り添うこと、これは誰もが必ず向き合わざるを得ないことです。さまざまな領域のなかでの寄り添い方を共有できるといいのかなと思います。最後に、カウンセラーにとって「人の話を聞く」という取り組みは、とてもエネルギーが必要です。「自利利他」という仏教用語があります。他者に対して何か成すことは自分にとっても良いことじゃないか、つまり私たちが他者に対して何らかの働きかけをし、受け止めていくことは、私にとっても大事なことという意味です。ぜひ皆さんのご意見やお考えを伺えられればありがたいと思います。

3. 鼎談（笈田、田上、井ノ山）

小林：これまで三人の先生からお話をいただきました。これから田所先生からまず口火を切っていただきたいと思います。

田所：三人の先生方のお話を聞きながら思ったこと、こんなことをテーマにお話しいただきたいということを4つほど考えました。一点目は、「変動する社会において変革をもたらすきっかけを作る者」としてカウンセラーがいると思います。カウンセラーとして社会変革に対してどのように取り組んでいくべきなのか。この点はカウンセラーのアドボカシーや社会正義につながってくると思います。二点目は、定義の問題です。日本カウンセリング学会の定義は、非常に長く、いろいろな要因を包含しているものになっています。しかし学会員が「われわれのカウンセリングとは」ということを説明するのが難しいと思います。このようなカウンセリングの定義をどのように変化させていくのか、または変化させていかないことも含めてお考えをお聞かせいただきたいと思います。三点目としては、現代の心理学として避けて通ることができないものだと思いますが、エビデンスに基づくカウンセリングをどのように確立していくのかということです。サイエンティスト–プラクティショナーモデルというものが、どの心理学の流派にも取り入れられてきました。この点についてカウンセリング心理士としてどのように取り入れていくことができるのか。最後に、「日本カウンセリング学会のカウンセリング心理士の売りは何なのか」ということです。私自身が考えているのは、一つはカウンセリング（面接）ができるということがカウンセリング心理士の売りだろうと思います。カウンセリングの役割は「治療」、「予防」、「教育や開発」であるといわれています。日本カウンセリング学会は主に予防や開発、教育に力を入れていこうという流れがありました。この 3 つの役割を等しく力を入れていくことがカウンセリング心理士としての特徴を出していくことだと思います。それぞれの役割に強みを持った心理士を養成して、社会的ニーズに答えていくことができるのではないかと私個人としては考えています。先生方には「カウンセリング心理士の売りは何のか」についてどのようにお考えであるのかについてお聞かせいただきたいと思います。

小林：4 点についてまとめてみました。1 点目が「変動する社会を作るきっかけ」つまりアドボカシーですとか社会正義についてどうなのか。一つひとついきましょうか。これも大きな問題だと思います。井ノ山先生の最後の方にこの点について触れられていたと思いますが、いかがでしょうか。

井ノ山：やはり日々変動する社会といったときに、何が変動し何に向き合う必要があるのかということが基本になると思います。社会においてはその蓋然性においてそれぞれ受け止め方が違ってきます。課題の抽出の仕方も違ってくると思います。個別の問題としては LGBTQ の問題であったり、ワーキングプアであったり、ヤングケアラーの問題であったり、社会経済的な背景から苦戦されている方も多々いらっしゃる。教育分野で、そのようなニーズのある子どものアドボカシーでいえば、合理的配慮や環境調整ということが出てくると思います。またそれは産業の部分でも個々への働きかけも大切だが、環境への働きかけもしなければならない。実は変革というのは、日々の生活の中にその要素はある。私たち自身の生活の中にもあると思っています。私たちが社会にどうアプローチしていくのかという点と、私たちがかかわっている人たちの環境調整を行っていくのか。これが社会変革にもつながっていくのだと思っています。井上孝代先生にはトランセンド法を学ばせていただきました。個人と個人のコンフリクト、グループのコンフリクト、宗教的な対立、民族的な問題、国家的な問題が現前にあるわけです。これらに対し不安感や緊張感をお持ちの方がいらっしゃる。マクロとミクロの複眼的思考と言ったらいいのでしょうか、このような思考で見ていくことが大事だと思います。

小林：僕自身も不登校のことをやっていて、大阪の中学生は約 1 割が長期欠席なんですね。全校平均でも 7%です。義務教育はそろそろ持たなくなってきているぞと実感しています。サポート校に 1、000 人予約が入ってきて、校舎を一つ建てなくてはいけなくなっている。例えばそのようなことが今起きていることなんですね。教育の世界ではとんでもないことが起きてきているんだということにも、声をあげない限りは誰も気が付かない、そのようなことが多々ある気がします。これについて田上先生、何かあればよろしくお願いします。

田上：大きい方でいえば、日本の教育はもう限界なんですよ。子ども一人ひとりのニーズに合うような教育内容を考えていかなければ、この先日本は成り立たないと思います。一部の子どもに配慮するというのではなく、すべての子どもに配慮するということを始めなければならない。先ほど井ノ山先生がおっしゃったように、それぞれのカウンセラーがぶつかっている課題や問題があると思います。僕は今企業のカウンセラーをやっていますが、そこではどれだけ多様性を受け入れる職場にしていくのかということが大きな課題です。発達の特性があったりみんな個性的です。そういう中で働きづらい思いをしている人がたくさんいるわけです。そういう環境をどうやって変えていくかについて、この間も人事課長とお話をしました。あるいはカウンセラー便りで問いかけていくとか、とにかく多様性を受け入れられる職場環境を作っていくことをやっています。

笈田：私も現場で DV を受けているお母さんとか、経済的に厳しいシングルマザーとか、そのような人は相談だけではどうにもならない。もちろん心理的なところはサポートしますが、実際に社会でというと支援の付けようがない。不登校の子どもを抱えているお母さんもいるし、考え方が変わって学校行かなくてもいいやとはなるけれども、じゃあその先子どもに対してどうしましょうかねというあたりがない。私が思ったのは、義務教育はおっしゃる通り機能は果たしていないなと思って

います。ひとつ面白いことをやっているところがあって、小林先生のところでもそうですけれども、子どもたちの内発的動機付けをして教えないという学校がある。そのあたりがヒントになるのではないかと思っています。外側から何かをするのではなく、内発的動機付けができていけば個々の役に立つし、そのようなことが多くなっていけば社会が変わっていくと思います。

小林：時間が気になるところではあります。田所先生の指摘の 4 番目がチャット（参加者からの意見）で入ってきています。「カウンセリング心理士の売りはなんですか」という点については、田上先生他、先生方がご指摘のように様々な職種がいるということがメリットであり、逆に言うと具体的にはどうしていくんだということもありました。このあたりについて田上先生からお願いします。

田上：カウンセリング心理士の特徴を言えば、カウンセラー以外の職をちゃんと持っているということだと思います。環境を変えるということも皆さん強調されているとおりです。まさにみんな環境の一部なんですよ。自分の職場をどうするかです。企業の中ならばいろいろな人とつながって働きやすい環境を、いろいろな人とつながって自ら作り出すということ。あるいは学校の中なら気になる子ども、特徴のある子どもに注目するのではなくて、そういう子どもを受け入れる集団を作ることです。僕は 30 年以上前から対人関係ゲームというものを作っています。よく構成的グループエンカウンターと混同されるのですが、構成的グループエンカウンターは心理教育で個々に向かっている。対人関係グループはそうではなくて、多様な子を、いわゆる不登校の子でもいじめにあっている子でも孤立している子でも受け入れる集団を作るということが、カウンセラーの役割の中の「予防」になります。集団が変わると個は変わります。そのことはずっと言ってきているのですが、カウンセラーはどうしても個に向いてしまうところがある。でも日本カウンセリング学会のこのメンバーならば環境に働きかけることができると思っています。

井ノ山：先程の社会変革というのは自分の周り、家庭であり地域でありコミュニティであり、やはりコミュニティアプローチというのはとても大切だと思います。社会変革というと、大きなものからと錯覚しがちですが、日常の延長の中に社会があります。その中で個と集団の中で化学変化を起こしていると思います。身近なところから取り組むことができればと思います。

小林：田上先生がおっしゃったことでグループダイナミクスというグループ自体が動いているんだという発想をきちっと持っていくという視座がきっと必要なんだと思います。参加者の皆さんからのご意見として「継続研修をして、更に高みに到達できるようなプログラムを作ってみたらどうかと思います」。普段の研修会は半分継続研修に近いものなんですけれども、各領域の中で高みに到達できるような研修・プログラムのようなものを作ってみたらというようなご提案も頂いております。その他にも公認心理師についてのお尋ねがありました。カウンセリング心理士の養成カリキュラム（2018）の中に、「公認心理師を取得しているものは、日本カウンセリング学会への入会を条件に、カウンセリング心理士養成カリキュラムを習得したものとみなすことができ、資格認定試験に合格した場合にはカウンセリング心理士となることができる」となっています。ただ、今、話し合っているのが、無条件に認定するので良いのだろうかということで、A 領域（カウンセリングの基礎理論）を学習してほしいということにしたらどうかということも話し合っています。まだ不確定です。「いつから始まりますか？」ということですけれども、カウンセリング心理士の資格試験が始まったらということになっています。それはいつかというと、今『カウンセリング心理学ハンドブック改訂

版』を作成しておりますので、それが刊行されて、皆さんがお読みになることができるようになって、それから少し時間が経ってからかなと思っています。早ければ来年でしょうが、再来年かもしれない、そんなような状況です。この点につきましては決まりましたら、正式に皆さんに発表することになっています。

笈田：いろいろとお話を聞いていて、まずは私たちから変わっていくということが必要ではないかと思いました。人を変えようというのではなくて、まずカウンセリング心理士会のメンバーが社会的な問題に対して自分自身の意見を持てたらと思いますし、それを発表したりすり合わせたりする機会がなかなか持てないので、そのような機会を持てたらと思っています。

田所：これからまた先生方にいろいろと引っ張っていただきたいと思います。笈田会長が一番強調されていたのが、「みんなで一緒にやりましょう」ということですので、そういった形でやっていくことが大切なのかなと思いました。

小林：今準備している『カウンセリング心理学ハンドブック』なのですが、一つ筋を通そうと思っています。一番大きな筋は、エンパワーメントしていくんだと言うことです。われわれが治すということではなく、クライエントたちが自分たちの力で乗り越えていけるようにエンパワーして、それからの人生を生きていくということなんです。大きな柱としてキャリアと生涯発達心理学を入れたんですけれども、先程井ノ山先生がおしゃっていたのですが、「キャリアはなりたい自分になる。でもだんだんありたい自分になる」というように変わってきていると思っています。そうすると、一生涯を通じて自分のテーマとして、私自身が去年大学教授という役割から別の役割へと移ってきて余計に思うのですが、「自分がどうありたいか」というのを実現していくのが、一番人生の中では幸せなんだろうなという気はしています。そういう人生が送れるように目の前に現れた人、それから苦しんでいる環境に働きかけていく。このような点が、一本の筋として『カウンセリング心理学ハンドブック』で示すことができたらいいなと思っています。

田上：僕は自分の身の回りで起きていることを少しでも、子どもたちが学びやすかったり大人たちが働きやすかったりする状況をつくることを、自分がやれる範囲で取り組みたいと思っています。これからのことは皆さんにお願いします。スーパーバイザーの養成はもっとうまくやれるようなシステムを作れば、スーパーバイザーがもっと増えていく。そのようなスーパーバイザーの指導を継続的に受けることができる人が増えれば、カウンセリング心理士はもっと力を付けていくことができるんじゃないかと思います。有能なスーパーバイザーを大量に養成するプログラムを、教育・スーパービジョン委員会で考えてもらいたいと思います。

小林：参加者の皆さんから、笈田先生に応える形で「クライエントの自己資源活動によって、それぞれの分野で人が成長することで社会が成長していくことに繋がるのではないか」とのことです。われわれ個々人が成長していくことが大切だと思いました。

笈田：みなさん、これだけの方々が集まってくれたことが嬉しく思います。オンラインであっても皆さんの顔をみられることでエンパワーメントされます。今は年に 4 回しか相互研究（研修）会がないんですけれども、それぞれの分野で増やしてもいいのかもしれないと思いました。皆さんがなるべく出会う機会を多くしていきたいと考えています。

小林：多職種連携という話がありましたが、その中で一番大切だと思うのが、昔、連携について調べた

ときに、「スタッフと顔見知りであること」というのが一番だったんですね。顔見知りであることが連携をしていくための一番の味噌なのかなと思います。これは他職種連携でも多職種連携でもとても大切なことだと思います。今笈田会長が言われたように、お互いが顔見知りであることが大切なのだと思います。プロジェクトチーム案が井ノ山先生から出ました。プロジェクトというのは喧嘩ができる関係でないといけない。これをきっかけに自分の意見をしっかりと主張し合う関係ができていければと願っています。

4. おわりに

今回のシンポジウムにおいて、日本カウンセリング学会カウンセリング心理士会について多くの視点から特徴が説明されました。大きくまとめてみると 2 つにまとめられると思います。1 つ目は、本学会のカウンセリング心理士の最大の特徴は、「カウンセラーという資格」を活かしながらさまざまな職種の中で活躍しているということです。2 つ目には、その特徴を最大限に生かしていくためには、互いの領域の専門家たちがさらに交流を持ち、相互作用を起こすことによってカウンセリング心理士の特徴をアピールしていくことが必要であるとまとめられるでしょう。今回のシンポジウムでは、「カウンセリング心理士」としての特徴やアイデンティティが、少しずつではありますが見えてきたような気がします。今後さらに、明確なアイデンティティを示すことができるように、各会員が交流、協力、協働を重ねながら専門性を研鑽していくことが必要だと思います。

一方で、一般社会から「カウンセリング」や「カウンセラー」には何が求められているのかという点を踏まえて活動していくことが、今後の心理職の活動を保証するために大切だと思われます。ここでは、そのための課題を大きく考えて 3 点示してみたいと思います。第一に、「自分たちのカウンセリングが効く根拠（エビデンス）を示すこと」です。何事にも客観的根拠を求めることが必要な時代であり、こうした時代の要請にしっかりと応えていくことが大切でしょう。第二に、すぐに解決策に走るのではなく、「目の前のクライエントの話をよく聴き、その人自身を知ろうとする態度を示すこと」です。これはカウンセリングコンピテンシーを身につけることが大切だという意味です。これが他の専門職ではない「カウンセラー」の最大の特徴と言って良いかもしれません。簡単なようで、近年は疎かになってきているものであると思います。そして第三に、「カウンセラーを教育する確固とした教育システムを確立すること」です。これにはスーパービジョンも含まれます。この点は教育・スーパービジョン委員会の目標であり、今後取り組むことが求められる最大の課題です。

教育・スーパービジョン委員会では、みなさまの感想やご意見を活かしながら、取り入れ、みなさまに提言したり、研修会を企画していきたいと考えています。会員のみなさまからの積極的な要望をお待ちしております。